第 12 回　第 13～15 章練習問題（理論対策）

＜本日のテーマ＞

前回はいかがでしたか。日商 2 級からの方は、等級別だけ少し難しかったかもしれませんね。でもそれ以外は比較的簡単な計算問題でした。
総合原価計算に慣れていない方は、とにかく過去問 10~15（11 除く）回を何度も解いて体になじませておいてください。

ところで今回は総合原価計算では一度も出題されていない連産品の計算を含む理論です。少しなじみが薄いかもしれませんね。

余裕のある方は当スクールの日商 1 級のフリーテキスト講座（無料講座）の連産品もあわせて確認頂くと良いと思います。

等級別はマック
組別はユーハイム
連産品はブタ

このイメージです

13.1（建設業において総合原価計算手法が活用されるケース）
→建材などの材料を自社生産した場合の材料原価の算出と個別原価計算への投入
→建材などの材料を他社にも販売するケース

13.2
イ○（組別計算）　ロ×（難）　ハ×（進捗率の精度を求めるかどうかでかわる）
ニ○　ホ×（分割→付加）　ヘ×（原価計算のため）

14.1
先入先出法→計算イメージから記述
総平均法　→　　〃

14.2（総合原価計算における仕掛品について）
仕掛品と半製品→外部に販売できる状態かどうか
個別との違い→個別は指図書数量を全部完成してはじめて完成品といて処理
仕掛品原価の計算不要→月初と月末の仕掛品をなくす（進捗率・数量同じでもＯＫ）

14.3
⑴原価のかかり具合が違うから。原材料は一般的には始点で投入されるので完成品でも仕掛品でも同一原価であるが、加工作業は工程が進むにつれて原価が増加していく。

⑵原材料も加工作業に比例して投入される場合は同じ計算方法になる。

15.1

	部門別計算	工程別計算
原価計算期間での原価集計の対象	製造間接費のみ	全原価要素
製品原価の確定時期	完成時	月末以降
間接費の配賦方法	配賦基準を用いて配分	組別計算のみ配賦するが、それ以外は配賦計算は行わない
仕掛品原価の計算	指図書毎に原価計算表にて計算	INPUT 原価から平均法などの方法を用いて計算

＜連産品＞
等級別→マックのＬとＭ
連産品→豚肉の例が書籍では多い（上・中・並・皮・ハム）
　　等級別と違い、物量やレベル（上多く並み少なくとかの）ｺﾝﾄﾛｰﾙができない

従って計算方法は価値移転的（Ａに 10kg、Ｂに 5kg のように物量などが把握できないと原価計算ができない）ではなく、負担能力主義（価格の高いものは原価も高いだろう）という特殊な方法を使う

過去問に出ていないので、設例 15.6 の分離点推定売価による計算もみておこう

第一工程

連結原価 460,628
405,600：464,000 で按分
・P1-214,817
・P2-245,781

P1×1,200 個 →（@42（50,400））→ 市価@380（456,000）P-1
（456,000－50,400＝405,600）

P2×1,600 個 →（@30（48,000））→ 市価＠320（512,000）P-2
（512,000－48,000＝464,000）

※正常市価は需要と供給のバランスで決まり、原価に対する同一の付加率で決まっている訳ではないが、主副の価値計算ができない以上は価格の高いものは高い原価を負担するという考え方で計算する

15.3

	等級製品	連産品
分割計算の方法	理論的な係数で分割	負担能力主義
生産形態 産出過程	同一の原材料からサイズなどの違いの製品を生産	同一の原材料から主副の区別のない製品を生産
製品の用途	服・量別の食品	石油・食肉
ﾌﾟﾛﾀﾞｸﾄﾐｯｸｽの変更	複数の原料から作ることもあるので可能	そもそも１つの原料から複数できるから無理

15.5

(1) 連結原価を甲と乙に見積追加加工費を考慮した正常市価などの基準で按分したうえで、実際追加加工費をそれぞれ加算する

(2) 主産物の原価計算を行い、完成品原価から副産物の評価額（正味売却価額）を控除して完成品原価とする